【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和４年度学校評価 結果

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	佐賀市立兵庫小学校
1　前年度 評価結果の概要	・いじめ問題や不登校児童支援等への対応については、管理職、学級及び学年等関係職員で早期に対応を図った。今後も、いじめ問題及び不登校児支援に対して、組織で対応を図っていく。 ・コロナ禍における授業及び学校行事等をどのようにつくっていくのかが課題であった。今後は、端末やIWBなどのICTの活用を含めた教育活動をICT推進リーダーや各主任等を中心に推
2　学校教育目標	あいさつ　笑顔　思いやり　心をそろえて　チーム兵庫 －正しく　かしこく　美しく－
3　本年度の重点目標	①心の教育の推進　②学力の向上　③落ち着いた学校づくり

4　重点取組内容・成果指標　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師を91%以上にする。	・校内研修を学期に1回以上開催し、教職員間でマイプランを共有し、学力向上への取組の促進を図る。	A	・マイプランの成果指標を達成した教師は91%以上であった。また、Q―U検査結果を生かした学級経営に取り組むことや、児童が学習価値ややりがいを感じることができるような取組を各学級で実践した。	A	・コロナ禍のため、友だちとの学び合いや発言などの制限があるが、児童は落ち着いた態度で学習に臨んでいる。
	○家庭学習の充実	○学年に応じた家庭学習時間を達成した児童を81%以上にする。	・家庭学習の手引き及び学習のルールを配布し、学校と家庭の両方で活用する。 ・年４回の「家庭学習がんばろう週間」を設け、家庭学習の習慣化を図る。	A	・「家庭学習がんばろう週間」を4回実施し、学年に応じた家庭学習時間を達成した児童は82%以上であった。また、家庭学習がんばろう週間の結果を各家庭に配布したり、家庭学習がんばろうカードに保護者のコメント欄を設けたりして家庭との連携を図った。	A	・わが子の学習に関心をもっている保護者は多いと思う。一方で、あまり関心が見られない保護者もいると思う。今後も、全家庭に啓発を進めてほしい。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○児童アンケートにおいて肯定的な回答をした児童を90%以上にする。 ・「ぼかぼか言葉」を使う ・「笑顔であいさつができる」など	・人権教室や兵庫小児童をよりよく育てるためのアンケートを実施する。 ・ふれあい道徳教育として、参観日に道徳の授業を公開し、家庭と連携して取り組む。	A	・年間3回、人権教室を開き、お互いを思いやる心や自分も友だちも大切にする心の育成に努めた。 ・兵庫小児童をよりよく育てるためのアンケートにおいて、友だちに「ぼかぼか言葉」を使っている児童は95.9%、あいさつや返事がよくできている児童は92%だった。 ・「ふれあい道徳教育」として、道徳の授業を全クラス公開することができた。	A	・挨拶を積極的にできる子どもを育ててほしい。コロナ禍のために、大きな声ではできないと思うが、人に挨拶をするという姿勢・態度は大切にしてほしい。
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ等問題行動が起きたとき組織的対応ができていると回答をした教師を90%以上にする。	・毎月児童及び保護者へのアンケートを実施する。 ・始業式の日に「レインボー作戦」の指導を全校で行い、その後各学級で指導を行う。 ・教育相談週間を設け、子どもの心の様子を把握し、学年、職員間で共有する。	A	・毎月、児童及び保護者へのアンケートを実施したことで、いじめを早期に発見し、対応することができた。 ・いじめ覚知後は、学級・学年担任、管理職、生徒指導担当など複数体制で対応し、解決に向けて連携を図ってきた。 ・始業式において「レインボー作戦」の指導を全校及び各学級で行い、全校児童に意識付けを行うことができた。 ・1学期に教育週間を設け、一人一人の児童とじっくり話をすることで、学習や生活、友だち関係で悩みをもつ子どもに寄り添った対応に努めた。	A	・いじめの問題に対しては、生活アンケートや教育相談週間などの取組で、早期発見につながっている。いじめを発見したときは児童に寄り添って、組織で対応できているので、児童も安心して相談しやすい。
	○特別支援教育の充実	○学級に配慮が必要な児童が在籍する場合「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」に基づいた支援を行った職員が、90%以上にする。	・校内教育支援会議を適宜開いたり、校内研修で児童の支援方法についての共通理解を深めたりして、具体的な支援に生かす。 ・巡回相談員や外部専門家等を積極的に活用する。	A	・特別支援教育コーディネーターを中心に校内支援会議や校内研修を計画的に開催し、支援を要する児童への働きかけについて共通理解を図った。 ・「個別の支援計画」や「個別の指導計画」を適宜見直し、適切な支援につなげることができた。	A	・たんぽぽ学級の先生方は、主任やコーディネーターを中心に児童に合った対応ができている。研修の機会は少なくなったかもしれないが、子どものために、保護者の期待に応えてほしい。
●健康・体つくり	①望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成 ②「安全に関する資質・能力の育成」	①「健康に食事は大切である」と考える児童を100%にする。 ②児童の交通事故を0（ゼロ）にする。	・「給食便り」で食育に関する内容を提供する。 ・年2回の「早寝・早起き・朝ご飯実践カード」を実施し、朝食の必要性を喚起する。 ・交通安全教室の実施、学級活動などで交通安全に関する授業を行う。	B	・佐賀県産の食材や行事食にまつわる話、健康と食事の関わり等を給食だよりで紹介した。給食の安全確保のための注意喚起の放送をしたり、教室巡回をしたりした。 ・「早寝・早起き・朝ごはん実践カード」の集計結果から朝食を摂っていない児童の割合が増えており、カードだけで朝食の必要性の周知は不十分だった。 ・年度初めに交通安全教室を実施し、自転車の安全な乗り方や踏切の渡り方等交通安全について指導し、全校児童に意識付けを行うことができた。各学級や学年担任、生徒指導担当が日頃から交通安全に関する指導を行うことができた。	B	・社会体育に取り組んでいる児童がいる一方で、登下校の時に車での送迎がよく見られる。親の意識も変えていかないといけない。 ・休み時間に外遊びをしているのをよく見かける。学校は、児童が運動に取り組む機会をつくっている。
	○「運動習慣の改善や定着化」	○休み時間には、外に出て元気に遊ぶ児童を育てる。	・学級や各委員会の計画により、外遊びの機会を多く設けるようにする。 ・生活重点月目標を設定し、集会の講話や掲示資料を活用した指導を行う。	A	・体育の授業で学習したことを休み時間にも行えるような場所の提供や教師の働きかけを行うことで縄跳びや鉄棒などボール遊びや鬼ごっこ以外の遊びを楽しむ児童が増えた。 ・運動委員会を中心に「もみじマラソン」（11月）を実施した。20分休み時間を活用し、全校児童が一斉に運動に取り組むことができた。、また，個人のマラソンカードの記録や学級での記録を競わせることで運動の意欲につなげた。	A	・最近の子どもたちは、食べ物のありがたさを知らない子が多い。食のアンケート結果を保護者に伝えたり、講演会を開いたりして啓発をしていくことが大切である。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ○繁忙期以外の月の時間外勤務時間平均を35時間以下にする。	・毎週金曜日を定時退勤日と設定する。 ・掲示板機能を活用し、連絡会の内容を効果的に伝達する。 ・3部会で業務を分担し、組織的に行う。	A	・毎週金曜日の定時退勤日は、全職員が協力して励行できた。繁忙期以外の時間外勤務時間平均を35時間以下にすることができた。	A	・職員室の環境づくり「セブンルール」を設定するなど、様々な角度から業務改善を進めていることが分かった。
	○タイムマネジメント能力の育成	○計画的に業務を推進できたと回答する職員を80%以上にする。	・職員研修（業務改善及び効率的な業務の進め方等）を学期に1回以上行う。	B	・2か月に1回程度、業務改善・働き方改革に関する資料を基にした研修を実施した。 ・ischoolの連絡掲示板を活用し、会議の短縮・効率化を図ることができた。	B	・先生方は、子どもの授業だけでなく、保護者の対応もしないといけないので、大変だと思う。持ち帰りの仕事もあるのではないかと心配している。

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
◎志を高める教育	◎自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	○児童アンケートを実施し、「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をした児童85%以上にする。	・地域の教育資源や人材等を活用した体験活動や授業では、児童に地域の自然、歴史、文化、公共施設のよさ等の理解を促進するとともに、活動の見通しと学びの振り返りを行う活動を仕組む。	A	・低中学年では、生活科・総合的な学習の時間や社会科の授業において、地域人材をゲストティーチャーとして招聘し、地域のよさを発見・体感させた。また、高学年では、国語科の教科書教材で伝記やプロフェッショナルな人の生き方を学んだことから、自らの夢や目標について考えを深めさせ	A	・児童と地域の人たちが、一緒になってたくさんの体験をしている。交流を通して、地域を大切に思う児童になってほしい。子どもたちは、自分たちでよく考えて活動ができている。 ・どの子も自分の夢をもっているのだろうか。それに向かって頑張っていくような子どもたちを育ててほし

●・・・県共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・いじめ問題や不登校児童支援等への対応については、管理職、学級及び学年等関係職員で早期に対応を図った。今後も、いじめ問題及び不登校児支援に対して、組織で対応を図っていく。 ・コロナ禍における授業及び学校行事等をどのようにつくっていくのかが課題であった。今後は、端末やIWBなどのICTの活用を含めた教育活動をICT推進リーダーや各主任等を中心に推進していく。 ・本年度の重点目標について、保護者アンケート及び職員アンケートでは、概ね達成できたとの成果が表れていた。今後も3部会を中心として、職員の創意と工夫を生かした取組の充実を図るとともに、職員研修の充実に努めたい。